

第一章 「光の塔」

「ようこそ『光の塔』へ。

入場に際して、お客様の声紋を確認させていただきます。……お名前をどうぞ」

厚手の防弾ガラスでつくられた扉をくぐり抜けると、電子的に立体結像した案内嬢が合成された美声で客を迎え入れる。

壮年の男であった。年齢の割に頑強そうな身体を包むグレーのスーツの胸元には「Y」「I」「G」の三文字を模式化したバッヂが鈍く光を返している。男は「案内嬢」の言葉に不機嫌そうなため息を一つ残し、抑揚のない声で無感動に名乗った。

「シエスタード・ランチエン。Y I G 査察部所属。……識別コードRRXB
—六六二五—三四一」

「……認識を完了しました。表層個人情報のご確認をお願いいたします」
合成音声に従って、シエスタードは双眼鏡のような小窓を覗きこむ。その中で赤い光点が彼の個人情報情報を形作っていた。

「本名…シエスタード・ランチエン

本籍…東ブロック第三エリア（以下パーソナル）

性別…男

年齢…五〇歳

所属「ユーセルティス財団情報局査察部」

持っていた薄手のスーツケースを床に置いてシエスタードは確認ボタンを押す。その瞳の上を一瞬走った赤い線を、彼は見逃さなかった。

(虹彩の確認……か。おそらく確認ボタンを利用して指紋のチェックもしているに違いない。ご苦勞なことだな)

来客のそんな感情の動きに気付く由もなく、案内嬢の合成音声が響く。

「シエスタード様、アポイントメントの確認が完了いたしました。リヤン・フーがお待ちしております。展望室へどうぞ」

「彼女」が指し示した先で立体案内板が明滅している。指示に従って、男はエレベーターに乗りこんだ。

最上階のボタンが自動的に点灯して、小さな加重感が彼の身体にのしかかる。目まぐるしく動く階数表示ランプをしばらく見ていた男は、やがてその赤茶色の瞳をまぶたに隠し、小さくもらした。

「『光の塔』……か……」

廢墟を踏みしめてそびえたつ銀色の超高層ビル。それは長い戦乱が産んだ孤児たちを救済し、彼らの知的独立を擁護するためにつくられた叡智の館である。

二八年前、なんの予告もなく「敵国」から撃ちこまれた核ミサイルは半径七〇キロにおよぶ廢墟と二百万を超える犠牲者を産み落とし、いまなお続く泥沼のような戦争の引き金となった。

そう、これほど大きな犠牲を出しながら、それは引き金にしか過ぎなかったのである。物資・工業力のみならず、軍事力においても世界有数の地位を誇っていた大国をこれだけ長期に渡って苦境に追いこんだ原因は水素原子の融合エネルギーなどではなかった。致命傷は、むしろそのミサイル着弾に

前後して仕掛けられた小さなゲリラ戦によって与えられたのである。

それは「静かな一夜」として知られる有線・無線を問わない徹底的な情報網分断作戦である。ネットワークケーブルが引き裂かれ、妨害電波と障害物質が大量投与された結果、「眠れる大国」は、その巨体をもてあますだけの鈍重な獣になりさがった。どこに敵がいるのか、誰が味方なのかもわからないまま目も耳も声すらも奪われた大国には、ただ仕掛けられる攻撃を手探りで追いつくしか術はなくなったのだ。それは、もはや持久戦とすら呼べるものではない。無慈悲で大規模な消耗戦は、確実に「眠れる大国」を窮迫させていた。

もどかしい戦いに閉塞感を抱き、先の見えない世に不安を感じていた国民の不満が爆発しそうになった頃、核攻撃の跡地に巨大な建造物が建てられる。

尖塔を思わせる裾広の地上部分一二〇階と強固なシエルターとしての機能を備えた地下部分十五階から成るその建物は、単なるビルの規模を越えて一つの都市という風体を擁していた。事実、そこは最先端のシステムを支えられて独立した「環境」であり、物資の循環とエネルギーの供給を自力でまかなう一つの閉空間だったのである。

戦時下とは思えないほどの贅をつくしたこの施設は、戦乱に苦しむすべての子供に無償で提供され、衣食住と安全が保証される中、十五歳になるまで誰でも望むだけの教育を受けることができるよう取りはからわれていた。

国と国民にそれを提供したのはユーセルティス財団。戦争で頭角をあらわした新興財閥ユーセルティス家が中核を成す巨大グループであり、その急激な成長ぶりから黒い噂の絶えない団体でもある。

「死の商人」とすら称されるユーセルティスからのプレゼントに懐疑的な目を向ける者もすくなくはなかったが、施設の魅力はそれをはるかに上回っていた。落成から八年、教育施設「光の塔」が抱える生徒の数はすでに五

桁に達しようとしていたのである。

身体にかかった重力がゆっくり薄れ、ドアの上の数字は一二〇を示して止まった。シエスタードの目の前でエレベーターの扉が開く。

「う……………」

その口から悲鳴に近い声もれた。ドアの外にはなにもなかったのだ。壁はもちろん、足元の床すら見当たらない。血の色を思わせる夕陽を受けて、はるか下方で二八年前につくられたクレーターが無表情にたたずんでいる。足元から伸びる「塔」の影は、廃虚と化した居住地を文字盤として時を刻む巨大な日時計であった。

「これはいったい……………」

宙に放り出されたような錯覚に襲われ、男の足は凍りつく。

「わざわざご足労願いましてもうしわけありません、監査員殿。」

下にある校長室にお呼びした方が手間も省けたのでしようが、ここはわたしのお気に入りです……………。ユーステルティス財団の方にはぜひとも一度見ていただきたいと思い、ご無理を聞いてもらうことにいたしました」

不意に放たれた言葉に、シエスタードは声の主を探る。西の空を不気味に彩る夕陽の中から白衣をまとった小柄な男がにじみ出るように現れ、宙を歩いてきた。

「リヤン・フリー…………セルバー殿……………か？ 『光の塔』総責任者の……………」

うなずきを示して老人は頭を下げる。白色のまじった細い髪が軽く揺れた。

「だが……………」

監査員の視線は、宙を踏みしめるリヤン・フリーの足元から離れない。

「どうなさいました？ シエスタード殿」

わずかに鼻にかかった声が部屋の中に深く響く。白衣の男の言葉はいた

ずらをたくらむ子供を思わせて楽しげだった。

「これはいったい、どういう手品だ？」

虚勢を張るような強い口調に肩をすくめると、「塔」の総責任者は宙を歩きながら応じる。

「映像空間ですよ。『塔』の周囲に仕込んだカメラで捉えたリアルタイムの映像を部屋に投影する……。既存の技術の単純な応用です。」

あなたがた、財団を非難しているわけではありませんが、われわれは籠に閉じこめられた小鳥も同然ですからね。ここでかりそめの自由を味わっているというわけです」

リヤン・フーの顔に笑みが浮かぶ。小柄な身体をよりいっそう小さく見せる猫背と年月を刻む白髪まじりの頭を持ちながらも、その瞳に覗く強い意志の輝きとよく動く表情は、彼を実際以上に若く見せていた。通りのよい声だけを聞くなら、あるいは監査員よりも年下に思えたかもしれない。

シエスタードは大きく息を吐いた。

「財団は、べつに教官の自由まで奪ったつもりなどないぞ」

「もちろんですとも。……ですから、あなたがたを非難しているわけではない……と申し上げました」

老人は唇を笑みの形にゆがめ、頭を下げる。

「……さて、客人をずっと立たせておくわけにもいきませう。お茶を用意してありますから、あちらでござ一緒にいかがですか？」

猫背の老人が掌で指し示す先に、二組のカップと皿を乗せてテーブルの天板が浮かんでいた。

「まさか、この上を私にも歩けと……？ 映像を切ることはできないのか？」

「もちろん可能ですが、そうすると殺風景な部屋になりますので……。」

やってみると楽しいものですよ。なによりこれも監査の内かと……。い

え、もちろん無理にとは申しませんが……」

にらみつけるような客の視線に気付かないそぶりを続け、白衣の老人はいった。その言葉を挑発と取って、シエスタードは左足をゆっくりエレベーターの外へ伸ばす。奥歯を噛みしめる音が「見えない部屋」の中で小さく響いた。

「……く……」

力のこもったシエスタードの足は、危なげなく中空に受け止められる。五〇歳という年齢を感じさせないほど鍛えあげられた彼の身体を支えながら、不可視の床はびくともしない。踏みしめた靴の裏の感触は確かなもので、それが精巧なスクリーンになっているとは思えないほどである。ガラスのきしむような音すらまったく立たないのは奇異とさえいええた。

「どうぞ。あちらです」

念を押すように白衣の男はふたたびテーブルを示したが、客の歩みは遅々として進まない。安全であると理解しながらも、彼は一步一步足探りでテーブルに向かうのがやっとだったのだ。しかし、綱渡りを思わせるその慎重な足どりは、たとえ滑稽であったとしても場違いに見えるものではない。すくなくとも、背後を歩くりヤン・フーは失笑で客を傷つけようとはしなかった。

「そこにソファが見えますか？」

不意にかけられた言葉に、監査員は飛び上がる。

「ソファだと？」

うわずった声が不必要に大きくなるのを知ってか、シエスタードはわずかに赤面していた。

「ええ。『M』ウォーター・ソファです。映像を邪魔しないよう、すこし見えにくくしてあるのですが……」

総責任者の視線の先で、空間の一部が波打つように歪んでいた。彼の言

葉通り、やわらかそうな長椅子の輪郭が見て取れる。

「失礼……」

ふらつくような足どりの監査員を追い越し、リヤン・フーは、テーブルをはきんだもう一つの「歪み」の上に腰掛ける。

「客人よりも先に座るのが礼を失した行動であることは重々承知しておりますが、どうぞお許しください。」

さあ、シエスタード殿も……」

慇懃な態度を取りながらも、老人の瞳には値踏みするような光が宿っている。シエスタードはわざと勢いよく着座した。ソファの形をつくっていた液体は監査員の身体をつつみこむように躍り、やがて使い手の楽な姿勢を理解して半固化する。

「どうですか？ これもわれらが『塔』の産物ですよ。正しい姿勢は心をくつろがせます」

説明を聞くまでもなく、シエスタードは自分の心の動きを正確に察知していた。目に見えるほどに表情を和らげて、監査員は口を開く。

「なるほど。つまり、その『心がくつろぐ姿勢』とやらを、このソファが『感知』しているというわけか……」

「ご満足いただけましたか？」

「私個人は……な。だが、まさかこんなもので総帥をもてなすつもりではあるまいな？ 財団が望んでいるのは安楽椅子などではないのだぞ」

「わかっておりますとも。いえ、ここに来るたびに、あの大きな花火の跡が思い出させてくれます。……いまが戦時中なのだということ」

リヤン・フーは目を細め、眼下の巨大なクレーターを見つめる。夕日を受けてたたずむ丸いくぼみは、血を盛った深皿を思わせて不気味だった。

「思い出させてくれる……か。たしかに、あらゆる情報が遮断されている

ためか、なかなか肌で実感できない戦争だ。トイ・トルーパー・プロジェクトの中心とはいえ、ここですら最前線基地というわけではないのだからな」「それでも、戦災が確実に広がっているという事実を一番理解しているのは、わたしたち『塔』の教官なのかもしれませんよ。この『光の塔』は、戦乱が産んだ孤児たちの知的独立を養護するために建てられたものなのですからね」

「そうだな」

皮肉な笑みがシエスタードの顔に浮かぶ。その仕草が気に入らないというように口を尖らせ、リャン・フーは返した。

「看板に偽りはありません。十五歳になるまで孤児の生活を保護し、その間に必要な教育を与えていることに間違いはないのです。」

ただ、生活条件の確保と教育の義務を受け持つ以上、教材を選ぶ権利はわれわれの方に備わっている。……それだけの話です」

総責任者は言葉を切り、テーブルの上のカップに手を伸ばした。

「プロジェクトは順調ですよ。SCI三部門の正規教育は確実に浸透しつつあります。まもなく、この『光の塔』から優秀な卒業生が輩出されることでしょう」

監査員はうなづく。

「報告は受けている。『塔』落成から今年で八年……。今回も含めて、これまで『塔』が送り出してきた十五歳のサンプルたちは中途入学した者ばかりで、六歳からの正規教育を完全にこなした者はいなかった。」

財団としては、無駄な金を使ったと思えなくもないが……」

カップの中身を空けた後、リャン・フーはゆっくり首を振る。

「たしかに成果だけを見るなら、これまでの活動は完全にボランティアです。」

……ですが、それも『塔』の活動を外部へアピールするためには必要な措

置かと……。信用を得るためには金も努力も時間も必要になるのです。そして、われわれは国中に信用してもらわなくてはならないのですから」

「わかっている。そもそも、それは財団が当初から決めていた方針だ。そのことに口をはさむつもりはない。」

職業病というやつだろうな……。査察部などに所属していると、無駄な投資や資財の浪費にはかり目が向いてしまうのだ」

「お察しします。……ですが、投資は無駄ではありません。いよいよ来年には『おもちゃの兵隊』第一期生が生まれるわけですから」

「そうだな。ずいぶん長く待たされたものだ。……いや、けっして非難しているわけではないのだが……」

「いつくろった監査員にうなずきを返すと、

「わかっておりますよ。しかし、くりかえしますが一人のトイ・トルーパーをつくりあげるためには例外なく九年の教育が必要になるのです。」

ご存じの通り、S C I部門では飛び級や落第を認めておりません。いえ、制度としては存在しますが、そういった目立つサンプルを『特別クラス』に抜き取ることが、われわれのもう一つの仕事の始まりなのです。」

もちろん、ごくまれなケース……。千人に一人もない程度の話ですが、まったく別の理由で選ばれた特別クラス編入生も存在するのですけれどね」

「優れた『素養』を持ったサンプル……。か。いずれにしても特別クラスという隠れ蓑を使うことで、周囲の生徒たちに怪しまれることなく被験体を調達できるというわけだ。」

そして、財団の真の狙いはそこにある。たしかに『光の塔』の主力商品はサイババル適性に優れた『おもちゃの兵隊』だが、それだけのためにこれだけの投資をしたりはしない。財団が求める真の商品は……」

「超能力部隊。とりわけ『洗脳兵器』の開発……。ですか」

客のいいかけた言葉を補うように「塔」の総責任者は口をはさむ。シエスタードは深くうなずいた。

「その通り。道具や装置を使うことなく敵の考えを瞬時に読み取り、さらには、それを操作する『力』……。実現すれば、おそるべき対人兵器となるだろう。」

『光の塔』の総責任者にリャン・フリー・セルバーを据えたのはそのためだ。特殊心理学の権威であり、スペサリス研究室の遺産に対してもっとも深い理解を示した者だからこそ、財団はM部門の運営も一任している」

「ありがたく思っております。……。実際、不思議なほどに理解できるのですよ。記憶の底から掘り起こすような……。……といえはいいすぎでしょうが、研究室が残した数々の論文やデータには、まるで自分が書いたものであるかのような親近感を覚えています」

頭を下げる白衣の老人から視線を外すと、シエスタードははるか下方のクレーターを見ながらいった。

「ユーザーティス総帥の興味も、トイ・トルーパーの育成より、むしろそこから外れた者が行き着く先……。『能力』の発掘と助成を目指したM部門にあると話されていたそうだ。おそらく、今回の見学もそれを重視した形になるだろう。」

つまりこれが本題だ。近々、ユーザーティス財団の総帥がここに見学に来られる。私はその下見として、とくにM部門を中心に監査するよう命じられた。もちろん、私の方でも『光の塔』の資料は読みあさったつもりだし、M部門についても勉強したが、実際に中を見てまわると勝手に勝手も違うだろう。案内をつけてもらいたいのだが用意してもらえるか？」

「はい。連絡は承っております。少々お待ちください」

総責任者は携帯通信機を取り出し、ボタンを押した。

「リイ、すぐに来てくれ。監査員殿がお待ちだ」

通信機を切ったリャン・フーは一枚の電子カードを差し出す。

「わたしの通行許可証です。どうぞ、お気のすむまで見学してください。すぐに案内人が参ります」

「……この液晶はなんなのだ？」

カードの下部に表示された十五桁の数字を見て、シエスタードは首をかしげる。

「識別用の数値でして、わたしの名前と役職、そして今日の日付が暗号化されて表示されているのです。当然、別のカードでは同じナンバーが出ないようになっていますし、日が変われば数も変わります」

「なるほど……」

シエスタードはカードをしまつて立ち上がった。ソファから身体を離れた瞬間、その足がわずかにふらつく。

「べつに高所恐怖症だというではないが、やはりこの部屋はぞっとしないな……。カードを返すのは、他の場所にしてももらえないだろうか？」

「わかりました。ご無理をいってもしわけありません」

「いや、気に入らなかつたわけではない。たしかにこれも監査の内だろう」

「そういつていただけると助かりますよ」

頭を下げるリャン・フーの向こうで、エレベーターのランプが点灯した。

「来たようだな。案内人の名前はたしか……」

「リイと申します。リイ・ギツヒス。リャン・フー先生の門下生で、普段は子供たちのカウンセリングをしています」

エレベーターから飛び出した声は野太い男のそれだった。開いた扉の奥では、研究者というよりもロクククライマーを思わせる風体の男が、黒い髭の中で歯を見せるような笑みを浮かべている。

「……カウンセリング？」

監査員がもらった言葉に、総責任者は苦笑しながら首を振った。

「といっても保健医などではありません。われらが『塔』の誇る心理学者にしてカウンセラー、わたしの一番弟子であり、現在はM部門の総括責任者をしている男です。

……リイ、あとはよろしく頼むぞ」

そういうながら、白衣の老人は大股で近づく弟子の肩を軽く叩いた。

「ええ、お任せください」

笑顔に乗せて威勢のよい返事をした後、山男は手を差し出す。

「よろしく……っと、失礼、お名前は……」

「私はシエスタードという。シエスタード・ランチェン。こちらこそよろしく」

監査員はリイの手を握りかえた。

「シエスタード殿……ですね。では、どこから案内いたしましたでしょうか？」

「そちらで総帥のための見学コースを用意したと聞いている。それに沿って進めてもらおうか」

「わかりました。……失礼します、リヤン・フー先生」

「塔」の総責任者は軽く手を上げて二人を見送る。エレベーターのランプが降下してゆく様子をしばらく目で追った後、ふたたび彼は携帯通信機に話しかけた。

「よし、スクリーンを切ってくれ」

低い言葉が響くと、西の空へ消えた夕陽を追いかけるように、周囲の景色が白い天井と壁に溶けこんでゆく。薄緑の色で染まる床の上で、コーヒーカーップと皿の下に足の短いテーブルが現れ、腰掛けていたソファが藍色の姿と形を見せはじめた。

やがて、完全に映像がなくなったとき、リヤン・フーの視線の先には、ガラスの壁と巨大な機械が出現していた。大人が五人がかりでやっと囲めるほどの装置である。直径三メートルを超える巨大な円筒を本体とし、そこから伸びるケーブルの束がいくつもの小さなヘルメットにつながっていた。ガラスの部屋では無粋な兜と仮面をつけた三十人近くの子供が椅子に座り、展望室を覗いている。

赤いゴーグル越しに投げかけられる無数の視線をわずらわしそうに払い、リヤン・フーは質問を發した。

「『水晶鏡』の調子はどうか?」

『AからZの二六人、すべて問題なしです。記録にも不備はありません』
通信機から若い女の声が響くと同時に防音ガラスが持ち上がる。低くうなるような独特の機械音が耳に届き、強い冷気が総責任者の白髪を撫でた。

「ご苦労だったな、ユーリオン」

「いえ、ほとんどリイ先生が調整してくださいましたから……」

白衣に身を包んだ女が縁なしの眼鏡の奥で笑みをつくる。機械を停止させて起動キーを兼ねた記録カードを抜き取ると、彼女はリヤン・フーの元にそれを運んだ。

「これが今回の結果です。シエスタード・ランチェン殿の心理、感情、表層意識の流れについて記録してあります」

「疑似人格の形成精度は?」

「上々です。時間平均でB―一レベル。瞬間的にはA―二レベルまで達しました」

「恐怖が人をあらわにする……か。『高所』という演出で本能的な恐怖をおおり、心の隙をつくる……。やはり、リイは優秀な心理学者だな」

師匠をほめられ、眼鏡の女は嬉しそうだった。

「記憶の解析には時間がかかりますが、表層意識からYIGなど、ユーザーティス財団の情報を断片的に入手しました。予想以上の収穫です。この国にこれだけ大きな影響を与えていながら、その実体は闇に包まれているも同然なのですからね」

「光の塔」の総責任者は首を振る。

「闇に包まれている？　むしろ逆だな。全世界の情報網から閉ざされたこの国にあつて、唯一外界を知っているのがユーザーティス財団なのだ……と、いいかえるべきだろう。」

彼らの衆愚政治は正しい。情報網が力を失ったいまのこの国でも『知の力』は強いのだ。……いや、いまのこの国だからこそ、知の力が強いのもかもしれませんな」

「だとすれば、すべての秘密を暴くこの『水晶鏡』にかなうものなど、この国には存在しないということになりますね」

ユーリオン・ロフォイの言葉は誇らしげだった。装置を愛でる視線は、できのよい子を見守る母親のようにも見える。リャン・フーはうなずきながらも、

「だが、これはまだまだ未完成だ。道具として使うには出力が足りないし、制御面にも大きな問題を抱えている」

「まったく解決策がないわけではありません。先日、リイ先生の新しい論文をお持ちしたはずですが？」

「ああ。読ませてもらった。精神操作で『入力端末』の同調を図り、『水晶鏡』の出力を上げる……か。いかにもリイらしい発想だな。」

たしかに『水晶鏡』の根本的な問題点は『端末』の連携調整にある。調べてみれば、この装置は『入力端末』全員の精神が二人三脚をして成り立っているようなものなのだ。総合的な出力だけは人海戦術で稼ぐこともできよ

うが、方向性を合わせることはそれだけ困難になるし、時間的にも距離的にもその効果を維持することは難しい。

波長のそろわない波を無理に重ね合わせれば減衰する……。これは自然の摂理というものだろう」

「ですが、位相をそろえた光を集めて光学レーザーをつくりだすように、『入力端末』の脳波の同期を取ることができれば、出力も効果範囲も飛躍的に高まるはずです」

「その方法でコントロールと出力アップを両立させるわけか。……実現できるなら、それはたしかに優れた手法だといえるな。

しかし、そのような面倒な手順を踏まなくとも、『エクシオ』一人を使えばそれですむことではないのか？」

意地の悪い口調で語るリャン・フーに対し、ユーリーンは反発するような声を上げた。

「いくら優れた『能力』を持っているとしても、コントロールできなければ意味はありません！」

それに、リイ先生の理論はまちがっていないはずですよ。理論を満たす精神操作を『端末』に施すことだって、けっして不可能な話ではありません」

「たしかに不可能ではない。だが……！」

強い口調でいいかけたリャン・フーは、大きく息を吐き出して心をおちつかせる。

「いや……。この議論は、あらためてリイとすることにしよう」

声を荒げたことを恥じるように、眼鏡の女は紅潮した顔を床に向けた。

「……もうしわけありませんでした。つい、取り乱してしまって……」

「おたがいさまだ。気にすることはない。」

わたしはこれで失礼しよう。いまは、一刻も早くシエスタード殿の記憶

を洗ってみたいからな。……もつとも、会議の前にその時間が取れるかどうかはわからないが……」

「それくらいなら、私どもが……」

「かまわん。これはプライバシーの侵害などというレベルの犯罪ではないのだ。なにかあったときに責任を取るのはわたしだけでいい。

……おまえも、財団を敵に回したくはないだろう？」

ユーリーンはうなずいた。

「では、ご苦労だった。『端末』たちにも十分な休養を与えておくように。過酷な労働を強いてしまったからな」

「リヤン・フー先生も、お疲れさまでした」

軽く手を上げてガラスの部屋を後にすると、白衣の老人は手の中の記録カードに目をやった。

（責任は一人で取る……か……。当然だろう。すべては、わたしの個人的な疑問なのだ。

総責任者として「塔」に配属させられて以来、抱きつづけていた疑問……。それを解く鍵はここにあるのだろうか？

わたしはずっと不思議に思っていた……。なぜ、わたしは見出されたのだろうか？ 片田舎の小さな大学で講師をしていた無名の心理学者を、なぜ財団は抜擢した？ それほどの人事がまかり通るのだろうか？ いくら戦争中だからといって……。

……いや、この戦争そのものが、どこかおかしいのだ。いまだ明らかにされない「敵国」とはどこなのだ？ もう、誰も疑問に思わなくなってしまうようだが、この国は、……いや、ユースルティス財団は本当にその正体をつかめていないのだろうか？ いくら電磁波の情報網が断られたからといって、二八年もの間、戦争している相手がわからないなどということは考え

られない。……そして、知っているなら、なぜ隠さなければならぬのか？
そう、なぜ隠す……？　なぜ財団は衆愚政治を敷かなければならぬの
だ？　たしかにユースセルティスは戦争で強大な組織にのしあがった。だが、
国交が途絶えたままでは、財団も衰えるのを待つのみだ。金は循環して初め
て価値が出るものだということくらい、有数の資産家であるユースセルティス
家が気付いていないはずもないだろうに……。

なにより腑に落ちないのは、この「光の塔」の存在だ。S C I部門がつく
るトイ・トルーパーとはなんだ？　なぜ、これほどの資財と十年近くもの時
間を注いで少年兵や少女兵を育てる？　この教育期間はとても尋常なもの
は思えない。

財団は、戦争がこれほど長期化することを見越していたのか？　……だと
するなら、もっと効率的な武器や兵器が作りだせたはずだ。いや、戦術、
戦略規模で戦況を変えることだってできただろう。なのに、それらすべての
可能性と引き換えに育てたのは、機械にまったく触れることなくサイババル
技術とコミュニケーション能力を磨きあげられた「おもちゃの兵隊」だけ……。

しかも兵士には必須なはずの「個性の排除」が、ここではまったくおこな
われていない。それどころか、インフォ・マテリアルとして自由な選択科目
を与え、知性の個体差を伸ばすなど、理解に苦しむばかりだ。……財団は、
いったいどういう戦闘を見越しているのだろうか？　……そして……)

いつの間にか握りしめていた記録カードに視線を落とし、老人はつぶやく。
「そして、最大の疑問がM部門だ。」

なぜ財団は『洗脳兵器』に……、いや『能力』にこだわるのだろうか？　わ
たしたちは、いったいなにをさせられているのだろうか？」

「このフロアと上の階……つまり、一〇五階と一〇六階がM部門の中枢です。ここには上下の階層とつながる階段がなく、エレベーターでしか出入りできません」

開いた扉の奥から野太い声が流れ出る。声の主は巧妙に隠されたスリットから電子カードを抜き取り、それを監査員に渡した。

「そして、エレベーターをこの階に止めるためにはこういった身分証明が必要になるというわけか……」

「塔」の総責任者の名が刻まれたカードを受け取りながら、シエスタード・ランチェンはたずねる。

「その通りです。この部門の存在を一般生徒に知られるわけにはいきませんからね。このすぐ下から四層は倉庫になっていますし、さらに下の五階分は教官たちのプライベート・ルームです。生徒が無許可で上がれるのはその下までなんですよ」

「考えすぎかもしれないが、直接ここに入らなくても、素性の知れないスペースがあれば怪しまれるのではないか？」

「もちろん、その点についても対策を取っています。このフロアは倉庫の一部として公開情報に載せているんですよ。すぐ下の階層は立体倉庫になっていますから、その高さをごまかすことで、この場所をデータの的にも目の届かない場所に行っているんです」

自信にあふれた笑みを浮かべて、山男は応じる。

「なるほど……。まさか倉庫の中に乗りこんで大きさを調べる者もないだろうからな」

得心の表情を浮かべる監査員に、リイ・ギツヒスは首を振った。

「する・しないの問題ではなく、事実上不可能なんです。資材の保管のため、倉庫は低温・低酸素雰囲気で保たれていますからね。まちがって入りこも

うものなら五分と持たず……」

太い喉元を自分でつかむと、心理学者は軽く舌を出してみせた。その様子に小さく眉をしかめた後、監査員は思い出したように問いかける。

「念のためにたずねるが、いままでにそういう事故はないのだろうか？」

「はい。落成以来、八年間で一件も……。教官にも生徒にもよくいい含めてありますし、安全装置も取りつけてありますからね」

回答に無言でうなずきながらシエスタードは歩みを進めた。

「ところで……」

先に行く山男がふりかえり、ユーザーティス財団の男にたずねかけてくる。

「個人的な好奇心ですが、お教えいただけませんか？ 財団内に、僕たちの研究しているものがどれくらい知られているのかということ……」

たとえばあなたは『能力』についてどの程度のことをご存じなのですか？」シエスタードは肩をすくめて、小さく首を振る。

「正直いって、あまり答えたくない質問だな。……私が知っているのは、他人の心を読み取り、また逆に自分の心を伝える『能力』が存在しているというくらいだ。……まあ、いわゆるテレパシーか。

そして、よくわからないのだが、そのテレパシーの延長線上には、自分の思い通りに相手を動かすことができる催眠術のような『力』があるらしいと聞いている。財団が欲している『洗脳兵器』はこの後者なのだろうか……。どうも、この両者の関係が、私には実感できないのだ」

「なるほど。興味深いお答えです」

髭に手をやり「塔」の教官は口の端を軽く持ち上げる。監査員は不満そうに口をとがらせ、

「あまり笑ってくれるな。この回答が百点満点で何点になるのかは知らないが、勉強不足のいいわけをさせてもらうなら、そもそもの情報がすくない

のだ」

心理学者はうなずき、

「おそらく上層部の中でも一握りの方しか知らないことなんでしょうね。無理もありません。ユーセルティス財団の扱う最大の商品は情報なんですから。

……まあ、それでも笑うなんてとんでもない。僕たちだってあまり偉そうなことをいえたものでもないんです。『能力』の解明はなかなか思うように進んでくれないからね。実際、得体の知れない力に『M』という名前をつけたことが、この『塔』の最大の成果だ……なんて公言する者だっているんですよ」

「……財団としては、その程度の成果で満足してもらっては困るのだがな」
自嘲的な笑いに釘を刺すように、シエスタードはいう。リイはおどけて大げさにうなずいてみせた。

「わかっております。もちろん僕たちだって仕事はきちんとしていますとも。こうして監査していただければ、その成果も理解していただけられるはずです。

……ただ、彼女の言葉はいつも辛辣でして……」

「彼女？」

疲れたような口調でつけ足した心理学者の言葉に、監査員は首をかしげる。

「汎用言語学グループの指導者、サラフェリ・ウィラーナのことですよ。言語学の権威にして口喧嘩の達人という『お母さん』です。彼女と口論して勝つ者など、すくなくともこの『塔』にはいません。……まあ、M部門の見学していれば嫌でも会うことになる相手ですから、どうぞお楽しみにしてください。」

それとあなたの回答ですが、ご安心を……。充分、及第点以上でしたよ。

大まかなところはつかんでいたただけにいるようなので、僕も説明で楽ができそうです」

「大まかなところ……か」

不服の表情を見せるシエスタードに、リイは軽く首を振り、

「でも、それが大事なんです。『能力』の存在を受け入れているか否かで、これから監査するものに対する見方が大きく変わるはずですからね」

「『能力』は、信じる者にしか見えない『王様の服』というわけか？」

童話を思い出して心理学者は笑みを浮かべる。

「僕たちは『詐欺師の仕立屋さん』だと？ ……とんでもない。『M』は確たる現象として存在します。ある程度であれば実験室での再現も可能ですし、望むなら被験体として、納得がいくまで体感していただくこともできます。

……ただ、それでも説明が難しいものだということ覚えておいていただきたいのですよ。科学技術の根本は『応用』です。再現できないものに価値はありません。ですが『M』は情報として再現することがきわめて困難であり、しかも再現された情報では価値が激減してしまうのです」

「……なにをいってるのか、よくわからんのだが」

「いきなり結論を突きつけられればそうでしょうね。ご心配なく。各研究室を紹介しながら、順を追って説明していきますから。

……と、そんなことをいっているうちに、さっそく最初の部屋が見えてきましたよ」

後方の客にふりかえるとリイは前方の扉を指さし、説明を加えた。

「ご存じの通り、M部門は四つのグループに分けられ、それぞれ独自の方法で『能力』を研究しています。ここは、僕がリヤン・フー先生から引き継いだ部屋です」

「気を悪くしたなら謝るが、『超越心理学』とは、ずいぶん大げさな名前だな」
入り口に掛かったプレートを見ながら、監査員はつぶやく。

「ジョセフ・B・ラインが拓いたパラ・サイコロジー……、いわゆる超心

理学とは少々畑が違いますからね。僕たちが扱ってるのは、単なる超能力を超えたものなんですよ」

「……つまり『M』は超能力でない……というわけか？」

心理学者の顔を興味深そうに眺めつつ、監査員は質問を投げかけた。

「僕たちはそう考えています。……ご存じでしょうか？ ラインの超心理学において超能力は『ESP』と『PK』に分類されます。『ESP』とは超感覚的知覚、すなわち通常では知りえない情報を知る能力のことであり、『テレパシー』『透視』『予知』などが含まれます。一方、『PK』とは『サイコキネシス』……、つまり念動のことで、物理法則に従わない仕事をおこなう心の力のことです。

一般に心靈現象と呼ばれるものは他にも多数ありますが、ラインは実験的に取り扱うことができ、その結果を統計的に処理できる超常現象としてこの二つを選び、それ以外を超心理学から切り捨てました」

「超心理学の沿革なら、私もすこしは勉強した。その聞きかじり程度の知識で専門家に話すのは気が引けるのだが、『M』が通常的手段では知ることができない『他人の心』を解する力であるならESPの範疇に入れていいのではないか？」

そして、透視が『心と物質の間で介在する力』であり、テレパシーが『心と心の間で働く力』であるという定義に従えば、まさしく『能力』はテレパシーのことだと思いがな？」

「さきほどあなたもいわれた通り、僕たちが『M』と呼んでいる能力のもっとも顕著な特徴は『感知』『伝達』『強制』の三つです。口や耳に依らない伝達という点だけを取るなら、『能力』はテレパシーと酷似しているのかもしれないません。

……ですが、『M』は知覚……、すなわち『情報を入手する手段』ではな

いんですよ」

シエスタードは首を振り、不快そうに眉根を寄せる。

「わからんな。おまえは私を混乱させてばかりいる……。他人の心を読むことが知覚でないとはどういうことだ？」

知らず知らずのうちに強くなる客の口調をそらすように、心理学者は穏やかな声を紡いだ。

「すべてを一度に説明するなど、それこそ『能力』でも持たない限り不可能です。見学しながらゆっくり聞いてください。僕はあなたを混乱させるつもりでしゃべっているわけではないのですから……。

……さあ、僕の研究室に着きましたよ」

通された場所は大きなモニタールームであった。壁に備えつけられた二〇台近くの高品位画面を見ながら、八名の男女が携帯記録装置にデータを入力している。すべてのモニターは一つの部屋を多角的に捉えているらしく、四人の子供がそれぞれ大人を相手にカード遊びをしている様子が映っていた。

訪問者に気付いて、研究者たちが頭を下げようとする。軽く上げた掌で部下を制し、グループの責任者は作業を続けるよう命じた。

「あれは……？」

質問を投げかけた監査員の視線はモニターに張りついている。心理学者は軽くうなずき、

「『能力者』を探す適性検査ですよ。『特別クラス』のサンプルには、かならずこれを受けさせています。

シエスタード殿は、ESPカードというものを知っておられますか？」

「……たしか、テレパシーの実験で使われるカードのことだろう？ 五枚一組でそれぞれ異なる記号が書かれている。カードを見た試験官の心を読み取って、被験者がカードの内容を予測するとか……」

山男の髭の中で、驚嘆の表情が浮かぶ。

「よくご存じですね……。より詳しくいえば、図形は星・十字・波・円・正方形の五種類。そして正確にいうなら、精神感应だけに限ったものではなくESP全般の実験に使うカードなんですが……」

「……だったな。カードの図柄を知る手段がテレパシーによるものなのか、透視によるものなのか、未来予知によるものなのか測定者側は知ることができない……という話を聞いた」

「その通りです。予知の可能性は実験方法によって削除できますが、残りの二つの力については明確に判別することは不可能……というのが超心理学の見解なんですよ。始祖ラインは、それゆえこのテレパシーと透視の二つをまとめて『汎ESP』と呼んでいます。」

結局、超心理学の手法では『超感覚的に感知する』という結果しか見出せないのです。そこに働く因果関係や理由は判別できません」

「……にもかかわらず、ここでも、そのテストをおこなっているというわけか？」

意地の悪い表情で紡がれた問いかけに、リイは深くうなずいてみせた。

「道具は一緒でも使い方がまったく違いますからね。……ここでは通常のテストとは逆に、被験者がカードを見て試験官に当てさせているんです」

シエスタードは眉根を寄せ、首をかしげる。

「……しかし、それではなんのテストになるというのだ？」

「財団がなにをお望みなのか、よもや忘れたとはいわないでしょう？ 僕たちが求めているのは『洗脳兵器』なんですよ」

「それはわかっている。だが、一足飛びに『心を伝える能力』をテストしても……」

意を得た質問に満足そうな表情を浮かべ、リイはすかさず問いかえした。

「……なぜ、一足飛びなんです？」

「なぜ……って、それこそ、なぜそんな質問をする？　まず相手の心を『感知』しなければ、自分の心を『伝達』することだってできないはずだろう」「非常にいい答えです。じつは、ここが『能力』を理解する上で大きな壁となっている点なんですよ。」

さきほど僕が言ったことを覚えていますか？　『M』は知覚ではないと……。一見すると『能力』の三つの特徴は『感知』『伝達』『強制』の順に開花していくもののように思えます。まず相手の心を知り、次に自分の心を伝え、そして相手に命令を与えるようになるという考え方は、非常に把握しやすいものですからね。シエスタード殿もそう思われているのでしょうか？」

肯定を示して、監査員はうなづく。

「それゆえ、『感知』がもっとも重要な能力のように思えるのです。これこそが『M』の柱になるものと……。ですが、じつは違うのです。最近になってわかったことですが、『能力』の土台は『感知』より、むしろ『伝達』だったのですよ」

「『伝達』……。だが、どうしてそれが『M』の根源になりうるのだ？」

「ここからは僕の仮説も入るのですが……。『能力者』は他者の心を受信することはできないのだ……と僕は考えています。彼らにできることは送信だけです」

「馬鹿な！　スペサリス研究室でも、おまえたちの実験結果でも……」

両の手を上げて客の言葉を遮ると、リィは続けた。

「そう。他者の心を読み取っているとしか思えないようなデータが出ています。シエスタード殿がテレパシーと捉えたことも、あながち間違いではありません。……ですが、それは直接的な知覚ではないというのが、僕の仮説なんですよ。」

『能力者』は、他者の心に『自分のイメージ』を送りこむことができます。これは、たとえば触手を伸ばすようなものだと考えてください。その手が触れれば、当然、被験者側の心にはなんらかの反応が生じます。異なる物体が接触すれば、その界面にはかならず相互作用が生じるものですからね。

……とすれば、そのような変化が一方にだけ生じると考えるのは不自然でしょう。反応は触手自身にも現れると考えるべきです。『能力者』はその触手に生じた反応をフィードバックすることで、間接的に相手の心を感じることができるのではないか……。僕はそう考えているんですよ。

たとえるなら、暗闇で手を伸ばして果物をつかむようなものです。視覚情報がなくても、触感を受け取りさえすれば、それがリンゴかバナナかパイナップルかくらいの区別はつくでしょう？」

「納得できないではないが……」

「いえ、いくつかの点で、こう考えた方が理解しやすくなるのです。

まず『感知』の深度は完全に『M』の強度にのみ依存していて相手を選びません。もし、これが相手の信号を捉えるようなものであるなら、その信号の強弱で相性や得手・不得手というものがあってもおかしくないはずです」

「特定レベル以上の『能力者』は、誰の心でも読むことができる……ということか？」

「そこまでの実験はできていませんが、おそらくそうだと思いますよ。

さらに『強制』ですが、シエスタード殿も最初におっしゃってましたよね。テレパシーと『強制』がどう結びつくのか理解しにくい……。これは、さきほどの例でいうなら果物を変形させるだけの握力があるか否かという形で理解できませんか？

『伝達』だけなら触れるだけでも充分ですが、『強制』するためには、相応の力が必要になってくるというわけです。もちろん、『伝達』の際にも微小

なレベルでなんらかの変化を引き起こすことは間違いありません。要は、その力の強弱なんですよ。

そしてこれがテレパシーと『M』の最大の違いです。テレパシーは超感覚的な『知覚』ですが、『能力』は知覚というよりも、むしろ『表現手段』と呼ぶべきものなんですよ。『M』が単なる超能力を超えた存在だという理由はここにあります。僕たちが超越心理学グループを名乗るわけも、理解していただけたでしょうか？ 要するに、『能力』は既存の科学では究明できない研究对象なんですよ」

「新しい科学……。結局、『能力』を持たない人間は、その力を間接的にしか把握できないということか？」

「独白じみた問いかけに、心理学者は肩をすくめてみせる。

「どうでしょう。『能力者』自身、理解しているのかどうかはわかりませんが、どね。僕たち人間だって、直接人間を認知することなどできはしないのですから。」

「……ですが、僕はこうも考えているのですよ。自分が『能力者』でないからこそ『M』をより深く把握できるのではないか……。と。事実を科学的に認識するためには客観的な視点というものが不可欠ですが、『当事者』にそれは不可能です。どうしても超えられない最後の一线というものがありますからね」

シエスタードはうなずきを送った。

「『客観』……。か。そして、それは科学技術の根本は応用だという、おまえの言葉につながるわけだな」

「その通りです。情報として再現できないものは科学として認められません。他への展開・応用ができないものは技術として未完成です。そして、その情報・応用の根本は客観的な視点にこそあると、僕は考えます。……。いえ、

僕の師匠リヤン・フリー・セルバー先生からそう学んだのです……というべきでしょうね。

M部門四グループの内、僕を含めた三人の責任者は同じスタンスで研究をしていますよ」

「三人？ では残った一人……」

突然、モニタールームに低い警報が鳴り響き、監査員の言葉を遮った。部屋中の画面が激しく明滅し、事態の異常を訴えている。

「サンプルナンバー九二二五、『M』適性オレンジ！ ……リィ先生！」

「ただちにガスを注入しろ！ 急げ！」

ふりかえった作業員に責任者は叫んだ。あわただしい雰囲気の中、白衣の男が忙しくコンソールを叩く。

無色の催眠ガスが投入され、カード遊びに興じていた子供たちと四人の試験官がモニターの中で次々に倒れはじめる。やがて警報は止まり、警戒信号を発していた画面もゆっくり五つ数えきる前に正常な姿に戻った。

「試験官の脳波は？」

「恒常性変化率、〇・〇〇〇〇ニパーセント。……正常範囲内です」

報告の音が響き、部屋中から安堵のため息がもれる。

「……よし。三〇秒後にガスを排出。一八〇秒以内にサンプルを隔離せよ」

命令を聞き、部屋にいた研究者たちはそれぞれの持ち場へと急ぐ。一息入れて客をふりかえるとリィは、

「驚かせてしまったようですね」

「たったいま、新たな『能力者』が見つかった……ということか？」

「ええ、あなたは幸運ですよ。これは、めったにご覧になれないショーですからね」

返ってきた言葉に、シエスタードは小さくため息をもらす。

「見世物扱いとはな……。ところで適性オレンジというのは？」

「『能力』の強度を示すために、僕たちは虹の七色をつかっています。すなわち、強い方から順に紫・藍・青・緑・黄色・橙・赤……。つまり、あの子のレベルは……」

「下から二番目……。ということか。それにしても乱暴な扱いだな。催眠ガスで部屋ごと沈黙させるなど神経質過ぎ……」

いいかけてモニターに視線をやった監査員は赤茶色の目を見開く。画面の中にはガスマスクをつけた白衣の男が二人現れていた。彼らは部屋に入ると「能力者」と判定された子供を押さえつけ、その頭部を金属の仮面で覆いはじめたのだ。

「……なんだ、あれは!?!」

監査員の声が怒気をはらんで鋭く響く。無音のはずのモニターの中で重い兜が取りつけられる音を耳に捉え、彼の顔はゆがんでいた。

「なにをそんなに驚かれるのです？ ただの安全装置ですよ。『能力』の発現を感知すると頭部に電流を流す特製のヘルメットです。もちろん被験者の生命に別状はありません。しばらく立てなくなる程度のショックと痛みを与えるだけです」

「スペサリスのあの遺産をまだ使っていたとはな。ここでは、もっと自由に『能力者』を育てていると思っていたが……」

シエスタードの言葉は吐き捨てるようだった。リイは口をとがらせ、淡々とした口調で返す。

「……そして、教官を見殺しにしろと？」

「そうはっていない。あの子は下から二番目程度の『能力』しかないのだろうか？ 危険も小さいはずではないのか」

「あなたには『M』の恐ろしさがわかっていないんです。たとえ適性レッ

ドでも、僕たちは同じことをしたでしょう」

想像以上に強いリイの口調に、監査員は一瞬口ごもった。

「『能力』の恐ろしさ？　だが『洗脳兵器』はまだ……」

「『M』はどんなに微小なレベルでも危険きわまりないものなんですよ。それを理解してもらえていなかったとは心外です。たしかに『洗脳兵器』は未完成ですが、それは制御と再現性の面で問題を残しているに過ぎません。」

そもそもこのテストは、試験官の脳波を測定してサンプルの適性を測るというものです。サンプルに『能力』があると判別された時点で、試験官の心はずでに『M』の影響を受けているのですよ。それがどれほど危険なことなのか想像できませんか？

くりかえしますが、『M』とは根本的に危険な存在なのです。もちろん、サンプルが自分の『能力』を自覚することがないよう、細心の注意を払ってテストをしてはいますが、目覚めたばかりの『能力者』にはどれほど注意してもしすぎるということはありません」

「訓練を受け、その力を磨かれた者よりも恐ろしいというのか？」

「教育されていないければ、歯止めが効きませんからね。」

そしてなにより怖いのは、『M』が表現手段であるという点にあります。人は『表現』することに快感を覚える生き物です。『能力』を自覚した者は、……とくにそれが抑制の効かない子供であればなおさら、その力を使いたがるものなんですよ」

「『M』の危険性……か」

シエスタードはゆっくりつぶやく。リイは大きく息をつき、

「もうしわけありませんでした。声を荒らげてしまったことは謝ります。」

ですが、このことはよく覚えておいてください。『能力』の恐ろしさを理解

していただけただけなら、この超越心理学での見学項目の八割以上は終了した

ことになります。

……以上が『M』の適性検査ですが、『能力』強化と制御のための教育現場もご覧になりますか？」

「いや、だいたい想像はつくから遠慮しておこう。次のグループへ案内してくれ」

うなずきを返すと、心理学者は思い出したようにモニタールームの奥をふりかえり、部下に二、三の指示を送った。

「忙しそうだな」

一足先に部屋を出ていた監査員が声をかけてくる。並んで歩きながら、心理学者は首を振った。

「べつにたいしたことではありません。いまの件に関していえば、完全に個人的な仕事ですし……。」

そうだ。個人的な……といえば、僕が疑問に思っていることが一つあるのですが……」

先をうながすように、シエスタードは首をかしげる。

「なぜ、ユーセルティス総帥はいまの時期になって『塔』に来られるのです？ 落成以来八年もの間、ただの一度も姿を見せたことのなかった人が……。」

いえ、この『光の塔』に限らず、まったくといっていいほど、人前には姿を現さない方なのでしょう？」

財団の男は肩をすくめる。

「なぜだろうな……。おかげで私もこんな露払いをしなければならなくなつた。……まあ、なかなか興味深い場所と研究ではあるが……。」

「監査員殿にも秘密……ですか。結局のところ、総帥閣下の考えることは、僕たち下々の者には知りようもないということなんでしょうかね？」

「知りたければ、見学の当日、総帥に直接たずねてみたらどうだ？ もっ

とも、答えてもらえるかどうかはわからんがな」

「……そうですね。その日を期待して待つことにします。

さて、次はすぐ目の前……、演算遺伝学グループの部屋をご案内いたしましょう」

自動ドアが開いて低く断続的な機械音がもれてきた。薄暗い部屋の中、無数のモニターが忙しそうに文字をはじき出し、淡い光を提供している。

「驚いたな。これほど広い部屋とは……」

機械の駆動音と冷却ファンの音に混じって、シエスタードの声が小さく反響する。

「この階層、一〇五階のおよそ七割がこの部屋に占領されています。ここは屋内プールやエクササイズルームを超えて、『光の塔』の中でも一番の広さをもつ部屋であり、最大のコンピュータ・バンクでもあるんですよ。

ここには、これまでに確認された『M』サンプル三五名のDNAパターンが蓄積されています。おそらく、あと半日もすれば、たったいま見つかった三六人目の情報も収められることでしょう」

「八年間で三六人か……。想像していた以上にすくないものだな」

「これまで『塔』が抱えた総生徒数は九八二七名ですから、単純に比率を取ると〇・四パーセント弱になりますね。

……しかも、これは記録の上での話です。現時点で活動可能な『M』は二二……、いえ二三名しかいません」

「すでに十三人の『能力者』を失っている……ということか」

唇をゆがめるほど奥歯を噛みしめて、シエスタードはつぶやいた。超越心理学グループの責任者は肩をすくめる。

「もったいない話だとは思いますが仕方ありません。間接的な調査や手探りだけでは遠からず限界に突き当たります。中身を調べようとすれば、どう

してもそれを壊さなければならぬときが来るものなんですよ」

「……四つの研究グループの中で一番多くの犠牲を強いているのは、やはり解剖生理学グループなのか？」

医学的な見地から「能力」に迫る研究部門の名を出し、監査員はたずねる。山男は小さく首を振った。

「それは意味のない質問です。サンプルを消費して得たデータは、すべてのグループに還元されるのですからね。M部門全体がこれだけの犠牲の元に成り立っているのだと考えていただけですか」

「そうだな……。では質問を変えるが、その記録上の三五人を能力のさきほどのレベル分けで見ると、人数比はどうなるのだ？」

「強度別ということですね？ 少々お待ちください」

案内人は懐から手帳を取り出し、ページをめくった。

「すみませんね、お待たせして。どうしても僕は紙に記録するやり方を変えられないんですよ……と、ありました。バイオレットが四人、インディゴが三人、ブルーが五人、グリーンが一人、イエローが六人、今回のサンプルを含めればオレンジが七人、レッドが九人です」

「正規分布を描いているわけでも、比例・逆比例の関係があるわけでもないということか」

「そうですね。僕たちが導入しているレベル分けの定義が妥当ではないのかもしれません。もちろん、それ以前の話として統計的に処理するには母集団が小さすぎるといふ問題はありますが……。一万人に満たないサンプルのほんの〇・四パーセントですからね」

説明を受けていたシエスタードは、一瞬、うなずきを止める。

「……と、待てよ？ いま『今回のサンプルを含めて……』といわなかったか？」

「オレンジの人数の話ですか？ たしかにそういいましたが、それがなにか？」

「私の計算間違いかもしれないが、いまの人数をすべて足しあわせると三五人になると思うのだが……？」

リイは口髭の中に苦笑いのような表情を浮かべつつ、手帳を内ポケットに入れた。

「さすがに油断のできない人ですね。べつにごまかすつもりではなかったんです。どうせ、汎用言語学グループに行けばわかることですし……」

「どうということだ」

問いかけに山男は肩をすくめ、

「残る一人、それは『エクシオ』です」

「……『エクシオ』？ それが数えられていない『能力者』の名前なのか？」
「そうではありません。エキストラ・チャイルド・ナンバー〇……、すなわちEX・C・〇の略称から転じた呼び名です。あれは規格外の力を持つ子供なんですよ」

「規格外……というと？」

「『エクシオ』はその名の通り、『能力』の強度で際立っている存在です。あえて『M』カラーで評価するならウルトラバイレットとでもなるのでしょうか……。とにかく、他のサンプルとは段違いの『力』を持った子供なんです……」

言葉を区切る心理学者に、監査員は顔を傾けて先をうながした。

「……いえ、もうしわけありませんが、詳しいことはサラフェリに聞いてください。彼女の汎用言語学グループは、たった一つのサンプル『エクシオ』を用いて『絶対言語』というべきものを模索することをテーマとしています。

この規格外の『能力者』に一番詳しいのはあのお母さんなんですよ。

さて、グループの紹介に戻りますが……、ここ、演算遺伝学グループではその〇・四パーセントのサンプルを遺伝子面から研究しています。具体的には『M』に特有なDNAパターンの探索がメインですが、将来的には、その技術を利用した『能力』の後天的付与……すなわち『人造能力者』の開発を目指しているんです」

「『人造……能力者』？」

「残念ながら、完成はまだまだ先の話ですけれどね。いまは遺伝子配列の解析も充分には終わっていない段階ですし……」

「仮にいま現在のデータと技術で『人造能力者』をつくれればどうなる？ その『能力』の程度は？」

「シミュレーションによると、『感知』だけならイエローレベルの能力の付与が可能です。術式と被験体との相性が合えば……の話ですが。ただ『伝達』はレッドが限界ですし、『強制』に至ってはまだまだ赤外領域です。『洗脳兵器』としては、とても実用的とはいえませんね」

「……『洗脳兵器』として実用的でなくとも、読心術程度の仕事なら可能とということか？」

持ち出された質問に、リイの顔が一瞬こわばった。巧みにそれを隠すと彼は平静を装い、

「『感知』の黄色というのは理論限界ですよ。それに、どれだけの仕事を与えるかにもよりますが、長く生きても半年程度の寿命しか約束できません。解剖生理学グループの知見によると、どうも後天的な『能力』は脳に大きな負担を強いるものようですから。」

読心術に利用するとしても、結局、人的資源が問題ですね。育成費用と時間も含めれば、収支を合わせるのが大変です」

「犠牲にする『人造能力者』以上の価値がある情報……か。たしかに、そ

んなものは、そうそうあるものではないだろうな」

監査員の言葉に、心理学者は深くうなづく。

「……と、あそこにゴーグルをつけた男が見えますか？ 彼がこのグループの責任者、アルヴィン・コレットです」

髭の案内人が指さす先で、白衣を着けた十数名の男女がコンソールを操作していた。その中央では小柄な身体に不似合いなほど大きなゴーグルをかぶった男が高い椅子に腰掛け、間断なく周りに指示をしている。

「ずいぶんと若く見えるが……？」

「今年、二五歳を迎えたばかりで、S C I部門を含めたグループの責任者としても最年少ですよ。」

もちろん、ここには年功序列なんて言葉はありません。それにふさわしい能力と指導力を有する者が上に立つ実力主義の世界です。彼はコンピュータの扱いに関して『塔』の中でも群を抜いており、遺伝子の三次元マッピングとそのデータ処理のためのプログラム開発で演算遺伝学グループに大きく貢献しているんです」

「実力主義……か。出資者側からすれば貴重な給金だ。効率的に使ってくれる方がありがたい。ところで、あのゴーグルはなんだ？ それこそ財団からの支給品とも思えないのだが……」

苦笑を浮かべながら、山男は質問に応じた。

「あれも彼の作品の一つですよ。遺伝子解析のための専用出力装置で、コンピュータ・バンク内の遺伝子配列を光と音に変換し、直接、網膜と鼓膜に投影するものです。アルヴィンは寝るとき以外……、シャワーや食事の際にもあれを手放しません」

「研究熱心なんだな」

「仲間内では『変わり者』で通っていますけどね。要するに、アルヴィン

学グループとは別の意味で、ここは彼のワンマングループなんです。

……質問なら僕が承りますよ。これでもガイドですから遠慮なくどうぞ」
「では二つ……。DNA解析をするということは、『能力者』と通常の間人は遺伝子レベルで異なっているということなのか？ それと『M』が遺伝するか否かについても知りたいのだが……」

質問に得心のうなずきを返し、山男は答える。

「痛いところを突かれましたね。答えをはぐらかすようですが、実のところ、その質問の解答を見つけ出すことこそが演算遺伝学グループのテーマなんです。つまり、『M』は人類にとって新たな獲得した形質なのか、それとも人はまったく別の種として『能力者』が存在しているのか……」

おそらく後者であり、遺伝子レベルでの違いがあるだろうという予測の元にこのグループは発足しましたが、まだ確証を得るだけのデータはありません。『人造能力者』ですら回答としては不十分です。結局、そこにも再現性や法則性が見出せないのですから……」

「それほど難しいことなのか、たしかにデータ数はすくなそうだが、通常の間人とDNAパターンを比較して見れば一目瞭然だと思いがな」

「僕も同じことを考えてアルヴェインに質問したことがあるんですが、彼の回答はこうでした。遺伝子パターンの相違はそんなに単純に比較できるものじゃない。同じホモ・サピエンスであっても共有している塩基配列は九九・八パーセントしかないのだ……と。」

現在知られている『能力者』のDNAパターンについて、その九五パーセント以上は人のそれと一致しているそうです。……ですが、人の遺伝子との比較をいうならチンパンジーでも九八・四パーセント、ゴリラとですら九八・三パーセントもの共有があるそうなので、その程度の数値ではとても判断できませんね。

面倒なことです。乱暴な話、人とサンプルとを交配させてみれば『答え』なんてすぐにも出るのでしょうか……」

心理学者の笑いに、監査員は冷たい視線を送る。

「……いえ、失言でした。『能力者』の立場が明らかでない以上、倫理にもとる実験を認めるつもりはありません」

リイはばつが悪そうに頭を下げた。

「そう願いたいな。……まあ、演算遺伝学への宿題は、また後日に回答をもらおう。次のグループへ案内してくれ」

「わかりました」